

初めての丹沢山系

近いようでなかなか実現しなかった丹沢山に登る気になったのは今年になってからである。日本旅客船協会の理事会が金曜日に開催される機会に次の土曜日曜を利用して一泊の山行計画をたてた。地図を買って調べると予想以上に大きな山塊である。最高峰は丹沢山ではなく蛭ヶ岳という山であった。丹沢山をほぼ中央にして東西南北いろんなルートで楽しめる山系であることも知ることができた。今回は表尾根、丹沢山、大倉尾根という一般的なルートを選んで歩いた。

行程

2007/03/16 秦野駅前泊

2007/03/17 秦野駅 = 蓑毛 ヤビツ峠 富士見山荘 ニノ塔 三ノ塔 鳥尾山
行者ヶ岳 新大日 塔ノ岳 竜ヶ馬場 丹沢山山頂・みやま山荘 泊

2007/03/18 みやま山荘 竜ヶ馬場 塔ノ岳 金冷シ 大倉尾根 大倉バス停 =
渋沢駅 = 小田原 = 大阪



初めての丹沢山系

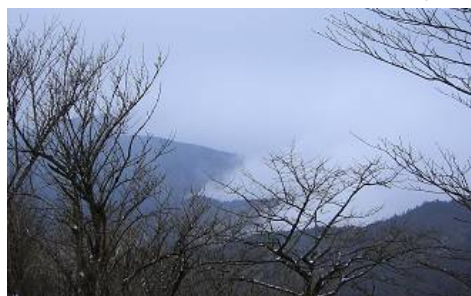
2007年3月16日夕方小田急線秦野駅に下車、驚いたことに登山口というイメージとはほど遠い立派な駅舎に駅前広場である。駅正面の北側には水無川という川が流れており時計台のあるしっかりした橋が架かっている。街灯も明るい、交番の巡査も親切であった。ホームページもない宿泊だけのビジネスホテルに到着、送っておいた宅急便を受け取り中身を入れ替えて近くの酒屋から家に送り返した。翌朝、近くの弁当屋でジャンボ手作りおにぎりを6個、駅構内のコンビニで水500mlペットボトルを3本購入、リュックに詰め込んだ。曇り空の中早めに駅前のバス停に着くと既に1台のバスが停車し中に沢山の人影が見える。ヤビツ峠行きは次のバスのはずだと思って近づくと案内板に今日は全て蓑毛折り返しになっているとのこと、いそいで車中の人になる。立っているのは学生らしく空席がまだある。空いている席に座るとすぐに発車となった。

20分ほどで蓑毛に到着、登山基地らしくトイレが完備しておりハイキングの人たちはそれぞれ用を足して歩き出す。ヤビツ峠までバスがいかってくれば随分と楽だと思いが仕方がない。登山届けを箱に入れ谷を左に見て歩き始める。粉雪が舞いだし寒くなりそうだ。高校生らしいグループの先生が「雨よりました」と話している。割烹蓑庵という割烹がある。舞い落ちてくる雪に庭の満開の梅の花もとまどっているようだ。全国名水百選秦野盆地湧水群遊水地という看板のあるところで木の橋を渡って対岸へ、そこからは山の腹をつづら折りに曲がりながら高度を上げていく。1時間近く登ると左側の尾根に自動車道のガードレールが見え、それがぐんぐん近づいてきて、ヤビツ峠760mにとび出した。ここまで70分、400mの高度差であった。同じバスに乗っていた人たちが休憩している。一息入れて車道を富士見山荘に向かう。さすがに峠道、北からの冷たい強風に指先がたちまち凍えてくる。山肌をまいたところで風は止み歩きやすくなった。

富士見山荘からは表尾根への上りにかかる。雪はそう多くはないが相変わらず降り続けている。昨日東京では史上最も遅い初雪が降ったこともあって、「なごり雪」の歌を思い出した。二ノ塔までは広い尾根のしっかりした急坂でぐんぐん高度を稼いでいく。植木の葉先が白くなっていく。振り返ると大山方面への稜線の南側は雲に覆われ、北側の谷間は視界がよくなってきている。ヘリコプターの爆音が聞こえていたので木の枝の間を目を凝らして探してみると下の方に青色の機体がホバリングしているのが見えた。



二ノ塔を越え三ノ塔(1204m)にたどり着き 11:10 一息ついて地図を見たが予想以上に先は長い。じっとしていると冷え込んでくるので休憩も早々に先を急ぐ。鳥尾山、行者ヶ岳付近はアップダウンが多い。勾配の大きいガレ場には鎖が取り



付けられていてこれを頼りに降りていく。若い人たちが追い越していき、対向する人も多い。行者ヶ岳(1215m12:20)で腰を下ろしにぎりめしを食う。ジャンボというだけあってでかい。1個で腹がふくれてしまった。気温が下がってきて冷たいので食べ終わったところですぐに歩き出した。

新大日までの上りはきつかったがそのあとは勾配も緩く快適な尾根筋である。それでも目の前にそびえる塔ノ岳(1491m)を見上げるとあそこまで登るのかと気持ちが萎えてくる。葉を落とした木々の枝には樹氷の花が咲き、まるで満開の梅の花のように見え、北側の斜面はモノクロの冬の景色、南側の斜面は多少早春の気配を感じさせなかなかいいものだ。



塔ノ岳山頂に着いたのは予定通り14:30であった。太い木の幹でできた塔ノ岳山頂と書かれた柱が広い山頂の真ん中にたっている。この山頂にある尊仏山荘は2階建ての立派な山小屋である。陽が射ってきて多少暖かくなってきた。3畳ほどの木のベンチで荷を降ろし、水を飲む。山荘からサンダル履きの人の良さそうな登山者ができて同じベンチに座った。どちらからともなく声をかけ会話が弾む。

下の戸沢というところに車を置いて登ってきたという。今日はこの尊仏山荘に宿泊すること、私にももうここでやめて泊まるのがいいと勧めてくれる。こちらは丹沢山のみやま山荘に電話を入れているということから断りの電話を入れればいいという。理由はこちらの方が展望がよく日の出と富士山がよく見えるが、丹沢山は周りが林で見通しが悪いのだということであった。彼は明日丹沢山から蛭ヶ岳を往復して帰るということであった。私にもそうしたらどうかと勧めてくれたが、やっぱり丹沢まで行きます、ありがとうとリュックを担いだ。思いがけず30分ばかり休憩したおかげで塔ノ岳から丹沢山までは快調であった。道もしっかりしていて、所々木道が整備され植生への配慮がなされている。

メェ〜〜という声に驚いてふりかえると木陰に鹿が一頭草をはんでいる。少し戻って近づいても平気な様子、ここまでの間に何カ所か植生保護柵が設置されていたが、この辺りまでも鹿が上がってきているのだ。そばにはやはり柵がしてあって柵の向こう側の草は食べられない。鹿にはこのあと竜ヶ馬場付近で3頭、頂上付近で走っている1頭出会うことになった。竜ヶ馬場というのは塔ノ岳と丹沢山の鞍部から丹沢山に登る途中の笹原である。笹原のなだらかで明るい雰囲気は気持ちいい。大山や塔ノ岳の展望もよく、大きなベンチが設置されのんびりしていきたくなるところだ。しかし塔ノ岳で休憩を長くとったのでここでは休まずに笹の間の狭い路や木道を先に進む。そのうち目の前にそびえる



る丹沢山頂の林の中にみやま山荘がちらりと認められた。そこからの登りは結構こたえたがそれでも笹の中からよっこらしよととびだすともうそこは丹沢山の山頂であった(16:30)。まず一等三角点を確認した。標高1567.1mである。その他に石や木製の山頂を示す標識があり、日本百名山と書かれていた。蛭ヶ岳方面の道標を確認したあとみやま山荘の玄関



ドアを開けた。さすがに中は暖かい。玄関脇にあるカウンターで受付をすまし、ほっとして靴ひもを解いた。与えられた場所はC 2、2階が宿泊エリアになっていて、東側がA、西側上段がB、下段がCで、C 2は奥から2番目である。AとCには番号毎にすべてリュックが置かれているので今日はかなり混雑しているようだが結局上段のBで休んだ客はなかったようである。

天井で頭を打たないように中腰になってC 2のところに行き、靴下を脱いだりセーターを着たり、リュックの整理をして旅装を解いた。足はかなり疲れていたが体調は良い。床に寝そべるとすぐにうとうととしたが、17時30分夕食の案内放送があって下に降りていくと食堂の前のコーナーでは8人のグループがめいめいに持ち寄ったアルコールで宴会中であった。食堂で指定された席に着く。前の席にはいかにも山好きそうないがぐり頭の若者H君、隣の人は顔は若そうだがあごひげに白い物が混じっている中年の男性Iさんである。ほかに3つテーブルがあってそれぞれ席に着いてお椀にご飯を入れている。缶ビールで軽く乾杯すると話も弾んでくる。H君は仕事でなかなか山に行けないが山大好きとのこと、今年5月の連休には近畿の奥がけをやりたいという。Iさんは新潟から東京に来た機会に登ってきたという。山麓に車を置いてきたとのことであった。それぞれいろんな状況の中でここまで来ているようである。ほかのグループもアルコールが入ってそうやかましくないが賑やかである。米の炊き具合はもう一つだったが焼き肉、野菜、汁物で腹もふくれ早々に二階に上がり横になった。H君は私の横、Iさんは東側の一番向こうにいる。東側の窓からは横浜方面に明かりが光り出している。しかし一旦毛布に横になると見に行く気になれず毛布をかぶり即眠り込んだ。18時半の夕食の用意ができたことを知らせる声が聞こえた。

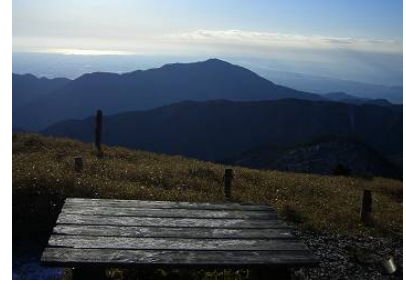
ざわついた雰囲気を目をあけると隣のH君以外このエリアには誰もいない。昨晚5時に出発するというのを耳にしたがその人たちであろう。窓はうっすらと明るさがあり日の出が近そうだ。セーター、上着を着込み外に出た。寒い。日の出の方向には木立がある。木立の中の日の出は初めてである。待つ間もなく東の空が赤く染まり木々の間に太陽が顔をのぞかせた。しばらく右に左に動いてよく見える位置を探したが同じことであった。「山頂で富士山がよく見えますよ」と誰かの声、三角点のところに行くと西の方がよく見わたされ真正面に富士の雄姿がなだらかなすそ野を広げている。上半分は雪に覆われそれが朝日を浴びてさくら色である。このような富士山の色は初めてであった。



気温が相当低いのか指先が冷たくなってきたので小屋に戻り毛布などをたたみリュックを詰め直して朝食、6時40分には小屋を後にした。改めて富士山を眺めようと山頂に行くときと昨夜話したI(伊藤)さんがいる。再び話している内一緒に下ろうということになった。



しばらくはきのう来た道である。天気は申し分ない。緩い下りで快適である。たちまち龍ヶ馬場に到着し大きな床几で休憩とした。東方真正面に大山、その左に東京湾、そして横浜である。小さいがランドマークタワーもひととき高く見えている。大山の右手は相模湾、三浦半島、その付け根近くに江ノ島が浮かんでいる。海が陽光を受けてキラキラと光っている。更に目を右に転じていくと塔ノ岳山頂、尊仏山荘が見える。さあ、とりあえずそこまで登れば後は長い下りだ。今朝も鹿がそこかしこに草を食べている。



大山(おおやま)を望む龍ヶ馬場で少し前の話しを。

3月はじめに弁天町にある関西汽船株の黒石社長を訪問した。応接に座ると正面の壁に みかんの花咲く丘 の額がかかっている。そのことを言うと
黒石社長K「そうなんです、私は海の見える山育ちなので海の仕事がしたくてこの世界に入ったのです」
兜H「山の中ってどちらですか？みかんですと愛媛か？和歌山？」
K「神奈川県なんです」 H「神奈川県なら足柄の方(金時山)ですか」
K「いえもう少し東です」 H(ちょうど丹沢を計画していたので)「丹沢ですか？」
K「ええ、その東の端のおおやまの麓なんです」
「大山おおやま」というのはその時初めて耳にしたのである。帰って地図を見ると私が歩き始める予定の場所のすぐ東に大山(1252m)があり寺や神社が多い。途中まではケーブルまでである。信仰の山である。
H「実は今月中旬に丹沢山に行こうと思っているのです」
たまたまのことであったが、偶然のことに由り訪問をしたことであった。帰ってから大山や富士山など何枚かの写真を送ったら丁寧なお礼の電話をいただいたことである。

塔ヶ岳への登りで昨日話した人とすれ違った。今日は予定通り丹沢、蛭ヶ岳を往復するということであった。蛭ヶ岳は標高1673m神奈川県の最高峰である。私もはじめはその山に是非と思っていたが、丹沢山から普通に歩いて往復3時間かかることを考え、今回は見合わせることにしたのである。

木でできた階段状の木道を登り切ると尊仏山荘の横に、そして明るく開けた塔ノ岳の山頂に到着した。この頂上は丹沢山と違って樹木がなく見晴らしがすばらしい。東に大山方面、西には箱根、愛鷹、富士山、南アルプス、遠く北アルプスの一部も望むことができる。これから歩いていく南の方に目を転じれば伊豆半島やはるか海の向こうに伊豆大島が霞んでいる。夜明けに見た富士山の雪はあかね色



であったが太陽が高く上がった今、山を覆っている雪はきらめくように白い。その裾野がこんなになだらかに見えるのもこの位置ならではのであろう。一人の僧侶が「祈登山安全 狗留尊佛如来」と書かれた石碑と2体の観音像を前に祈っている。菅笠と着衣、肩から斜めにかけての袋は僧侶であるが、足下はしっかりしたトレッキングシューズに長いスパッツ姿であった。

しばしの休憩の後南に向いて歩き始める。私はゆっくり歩くつもりなので伊藤さんに先に歩いてもらう。歩きながらの会話は聞き取れないので黙々と歩く。当初は少し西にある鍋割山を經由しようかと考えていたが下の方の林道が工事中で通行禁止とのことで、塔ノ岳から一つ目の分岐、金冷シで左に折れ大倉尾根に入る。地図を見ていたとき金冷シを「キンレイシ」と読んでどんな意味だろうと思っていたが、伊藤さんが「キンヒヤシ」でしようと言う。それならわからないことはないが、どうしてこんな名をつけたんでしょうね、と不思議なことであった。花立山荘付近で黄色のポリタンクを背負子に乗せて登っていく若者に出会った。小屋近くの人に聞くと上の小屋に灯油を運んでいるとのこと、いわゆるポッカである。一日に4回上り下りすることもあるということであった。このあたりで新潟に帰る伊藤さんには先を急いでもらうことにし、その背中を見送った。



緩急おりまぜての下り一筋の尾根路である。日曜日ということもあって沢山の登山者とすれちがった。最大は23人の中高年のグループであった。関東の人たちにとってはごく一般的なハイキングコースなのであろう。高校山岳部とすれちがった。重そうなリュックなので最後尾のリーダーとおぼしき人に聞くと訓練ですという返事、若いときのことを思い出した。石を積んでいるのかと訊ねると水だということであった。30kg以上はあるであろうと思いつつ見送った。緩やかなところでは左右の景色を見ながら気持ちよく歩いていく。きのう歩いた表尾根が左の方に見え、三ノ塔が次第に後方に移っていく。右側に見える富士山は次第に前衛の尾根に隠れていく。



大倉尾根には山小屋が多い。花立山荘に始まり、堀山の家、駒止茶屋、見晴茶屋、大倉山の家、それぞれの小屋では中に何人かの客がいて談笑している。一番低いところにある観音茶屋の前は屋根がかけられテーブルが並べられている。左の方に降りていく道があるのでてっきりそれだと思って足を向けたら、なにやら声がする。面を上げると茶屋の中から小柄なおばさんが出てきて、バス停へは小屋の前を通ってと教えてくれた。下への道は水無察へ下りる道とのこと、教えてもらってそしらぬ顔で先に行くのも悪いし、長く休憩をとっていなかったので一服することにし、コーヒーを注文した。このルートは登山者は多いがさすがのこの場所で宿泊する人もなく小屋の維持は大変のようだ。下の水無察というのが本業でここは片手間なのかもしれない。

チラシがあるので見てみると「第21回丹沢ポッカ駅伝競争大会」1チーム4人で下のバス停から花立山荘まで40kgの荷を担いで駆け登るらしい。全長6,187m、標高差1,010m、10

k g、20 k gのクラスもある。荷は砂利の袋で運んだ後は山道の整備に活用するという企画である。大学1年の夏、白馬の北、神の田圃早稲田のヒュッテを基地に山小屋建設のため数日ボッカを楽しんだことがあるが今でもボッカという言葉があるのにいささか驚きであった。完成した山小屋は今も閉鎖されてしまった。小屋を出てしばらく下ると舗装された道になった。克童窯という窯元があったり、そのうち桜や菜の花が咲き誇る明るい平野になった。大倉バス停についたのは11時40分、周囲は広く大きな売店や秦野戸川公園パークセンターなど施設があり、大阪の山麓のバス停とは違う雰囲気である。リュックを詰め替え、おにぎりを食べ、残った水を飲み、12時15分のバスで小田急渋谷に向かった。携帯電話を見ると睦子から心配しているとのメールと留守録が入っている。山上は全て圏外であったがみやま山荘の電話番号が090-****-****なので私の携帯にも通じると思ったのであろう。山小屋の電話は人工衛星を利用した特別の物で一般のモバイルは山上では通じない。いくらメールを送っても返信がないので心配してくれていたのである。早速無事下山したことを伝え小田急、新幹線を乗り継いで大阪に向かった。数日間ふくらはぎや太股の筋肉痛が続いたが連休の熊野古道行きにはよいトレーニングになった。



塔ヶ岳からのパノラマ

丹沢山系を歩いて

今年の目標を健康の保持増進とし、毎日軽い運動と時々近くの山を歩こうと考えていた。当面の目標は5月連休の熊野古道小辺路行きである。昨年はいささか準備不足で足が痛くなってしまったこともあり今年2月の誕生日に金剛山、その後六甲山そして今回丹沢山系を歩いて足腰をならした。毎日少しずつトレーニングしていたことで今回足がつることもなく無事下山することができてほっとしているところである。東京では遅い初雪、丹沢山系では初冬の装いであった。しかし翌日は一点の雲もなく晴れわたり、富士山はじめ四方の景色を思う存分堪能する事ができた。関東の山は金時山、石割山、毛無山に次いで3回目である。丹沢山系はよく知られた山系でいつかは登りたいと考えていたが今まで機会を作れなかった。回思い切って実行し悔いを残すこともなくなった。

今年の小辺路には西川、外山、池田君が加わり心丈夫であるがゆっくり楽しむつもりだ。

今から楽しみである。2007/04/05